

岸正利
Masatoshi Kishi

虹が流れるように

川柳《色即是空》ものがたり



『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

口絵省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

岸正利
Masatoshi Kishi

虹が流れるように

川柳《色即是空》ものがたり



はしがき

数年前、川柳を散りばめた仏事と仏教についての本を出したが、これは旦那寺であった真言宗僧侶の言動にこだわりすぎたため、仏事の矛盾を突くに急で、そこにひそむ宗教性を損ねるといふ難点があった。出版後、三年間、一旦は放下し、黙考のすえ、その盲点を省みるべく、同じ真言宗の学僧でもあり密教学の権威でもある金岡秀友著『金岡秀友選集』（全十巻）を中心に熟読玩味しつつ、折々の思いを書きとどめたのがこの本である。ただ、筆者は学者でも僧侶でもないから、単にそのひそみに倣うならのではなく、蟪蛄こうこの斧をかざすつもりで、無宗派の一市井人の目線で、日頃の問いや思いを五七五に重ね合わせてみたい。

*

数年前のその本は、やや煩瑣なところがあつたので、今回は句に関係のない引用は避け、展開上、必要な事項にかぎり圧縮して引用し、頁ごとに区切り、密度濃く、かつシンプルなかたちにまとめるように心がけた。むろん参照した本は随筆などの類いではない。ただ

出典を詳らかにしない道半ばの者の奔放な語り口は、迂遠、かつ際物きわものになりやすいものであり、こういう本に求められることは、仏典や学者の仏教書にどう書かれているか、その典拠を明らかにして、それをどう感じとったかであつて、冗漫な巧言などではないと思う。そこで、句の成り立ちの経緯を説明したり、論旨を展開したりする必要がある場合には、専門用語を忠実に取り込み、あるいは、専門家の論を少なからず参照した。全体としても一つの章としても、一応、順を踏んでいるので、順を追つて読んでいただいて、いくつかが読まれるかたがたの琴線に触れるところがあれば幸いである。ただ、前記のように筆者は仏教学者ではないので、草稿の段階で、仏教学の著名な先生がたに目を通していただいた。

*

仏教学者でない者にとつて（仏事は別として）仏教は遠いもののように思われやすいが、じつは、仏教も「般若心経」も、身近なものではないか。日常においても、〈空〉を実感することも多い。であれば、学者が筆を染めにくい日常の茶飯事や一つ話を、専門外の者も仏教的に紡ぐことができると思う……しかし……たとえば玄奘じやう・般若心経の本をひもとくと、多くは原文を離れて、現代的な解釈や奔放な詩想に筆をゆだね、あるいは、思想を語り、類書から連想させ、体験的に、随想風に、重層的に積義するなど、様々に、

有意義に取り組まれてはいるが、ひるがえって、原文と向き合くと、たとえば「般若波羅蜜多」や「苦厄を度す」なども、肝心のところが、茫洋と、はずされている。

そこで本書は、見開き二枚に、玄辨訳・心経を逐語的に分かりやすく意識し、漢訳文の横に一行一句ずつ併記してみようと思う。玄辨訳・心経は、現代的な解釈や奔放な詩想にゆだねるよりも、脳裏で意識しつつ原文を讀誦するままだに玩味すべきものであり、かつ、その意識は、研究の伝統に倣^{まな}んで、漢訳文に素直に沿うものでありたい。両者は、つかずはなれず協奏してこそ、その真価を放つものであるから。また、漢文は下から戻って読むものではなく、上から一區^{ひとくぎ}切りずつ意味を取りながら流し読むべきものであり、その方が分かりやすく、また語句の格調や深い含蓄を味わうこともできるからでもある。

わけでも、日常、一般の者が「風」や「縁」や「空^{くう}」など、仏教とどう関わっているか、また、どう関わり得るのかという視点から、個人的な思いを、こんな「川柳ものがたり」とすることで、個人の水域を離れることができるのではないか、という心積りもある。

書名は、99頁の記述などにも関連づけ、目次の「風」「縁」「空^{くう}」の三つになぞらえて『虹が流れるように』とした。

目次

はしがき

7

第一章 風

風と光と

14

風還る

20

死と生と

30

第二章 縁

老いと

40

有情と

54

観音と

60

死と宿縁と

80

第三章 空

日常において ————— 92

『般若心経』の逐語的意識との関連で ————— 100

『中論』との関連で ————— 124

日本において ————— 132

〈空〉の章の終わりに ————— 138

第四章 跋

この本の句に関連して ————— 146

漢訳経典の「逃れる」意味の「度」の用例 ————— 154

参考文献 162

あとがき 164

索引 191

第一章 風

風
と
光
と

万緑ばんりよくに 卒塔婆そとうば燃えよ 風となれ

しっこくを抜ける 蒼あおき風 ひかる

みどりなす 地平ちへいに 伽藍がらん みだ己心こしん

この三句は、事情あつて愛着と忌避きひないまぜの故郷と決別したときの連作の一部である。「しっこく」は漆黒と桎梏を掛ける。いまは様々な自然葬も許されるので、たとえば骨粉を海に落下させれば、蝶のように飛んで風となるだろう。あとのことは、子どもや孫たちの思いに任せるほかないが。三番目の句は、大伽藍も阿弥陀仏も、人それぞれの心の中にあるという気持ちから、「己心」を全体に懸けた（「己心」は23頁に注記）。

暮昏^{くら}し

山 風ひかり 海はるか

沖あいを 蝶々がわたる 風ひかる

灰飛んで 宇宙を呑んで ゆあゆよーん

光は遥かに遠いが、そう思えば、いま、ここに、その余光に浴することもできる。

ひかり はるか こもれび ゆらぎ こぼるるよ

*

山深い寺院に響く声明しょうみやうに聴き入っていると、山風は遠く、蟬時雨は遠く近く、協奏して、去りがたい。寺と境内は、「現代」が失った故郷を残していて、人を奥へと誘う。

声明に　山風遠く　せみしぐれ

*

そして今日一日を生きて、夜半、終い湯に入ると、至福の安すらぎのひとつときが訪れる。幼少期の澄み切った空の下、山と丘に抱かれた、ふるさとの川に横たわる思いである。

終い湯の　ひかりかぎろひ　虫しぐれ

最後の句は、もと政治部記者・青木周三氏の俳句 終ひ湯のこの幸せや虫時雨（周遊）の模倣作である。日常、「光」を感じさせる句として、了解を得て、ここに挙げた。

風と光は自然の装飾であるが、仏教の世界では、マンダラなどの人為的な飾り（莊嚴）も無視することはできない。深海の「水は、底も表面も変わらない。（だが、そのなかに一歩入れば）仏の世界に入ったのであり、マンダラも一番外側に入ったら、なかのほうに行くようにしなければならぬが、角度を変えてみれば、マンダラに（一歩でも）入れれば安心である。」空海は、心を十段階に分けたが、最後が、見るものすべてが仏の世界のように見えてくるという第十住心で、仏具などの「莊嚴」の世界のなかで信心決定すると、どこでも仏の光を感じることができる。日常のなかで仏を見て、宗教的に生きる（ことができる。）金堂の香は香りのいいくべもの、華は花、塗は体に塗る香、鬘は首飾りで、これらは仏具であるとともに菩薩であり、花ひとつでも救われることがある。香華は下根の者を大日如来とつなぐ香菩薩である。¹⁾（そういう例を幾つか挙げていけると思う。）

1) 『金岡秀友選集』・善本社・第一巻180～183、71、39～43頁（なお本書の48、71頁参照）

*

日常的な憩いの沐浴から、あまねく光をたたえる大宇宙に身を投じ、思いを馳せると、身も心も無量の光のなかにある。(阿弥陀は、もともと無量光であった。)

ひかりはるか はるかはるかや 無量光

信心決定

信心が定まっについて、確固として動かないことをいう。

仏教は、少しずつでも善い方向に変えていくとともに、普遍的なものも一方にはある、と信じて、それを腹の底に据えることが大事である。これが「信心決定」、「不退転」、「初地即極」で、(たとえば)合掌の瞬間が決め手である。最初の境地(初地)に入れば、さいこの極意を極めたと同じで「初地即極意」である¹⁾。

下根…仏道を修める力の弱い者のこと。

1) 『金岡秀友選集』・善本社・第一巻・177～179頁

風
還
る

あの風たこの 天たかに還らむ 風さそう

天空高く上がった風は、一見、微動だにしないが、そこには風があると分かる。この天はその風の辺り、それほど高い所ではない。高地チベットでは、あちこちの旗タムチョク立てに紐を張り、色とりどりの布を結びつける。呪文ダラニの経を刷った布・風馬ルンタに託された人々の祈りは、風となって天へ舞い上がるのである。日本では、親鸞は、死後、屍を魚に与えよ、と言い（弟子はそうしなかったが）、川口慧海えかいは、屍を鳥に与え、鳥の一部となって風にかえり、天を舞うと言った。が、私は、慧海のような「輪廻転生」を考えるまでには至っていない。すべては土や水、そして、風かぜの一微塵みじんとして大自然に還る。……そう思うと、半世紀以上も前に、若くして逝った母代わりの姉たちの風も爽やかに還って来て、追憶をさそう。

地つづきの この世に涼し 鳳仙花ほうせんか

杳とわい日の 日傘の姉の 風還る

仮名本に 弥陀も浄土も 胸のうち

前の句の「天」は、むろん「天国や浄土」ではない。江戸時代初期の短編・仮名草子の『竹斎』の中ほどにも、「阿弥陀も浄土も自分の心のうちにある、浄土は西方十萬億土の遠くにあるわけではない」と書かれている。人は、死んで自然に還る。山や森、川や海、そして天に還る。永劫の昔から、今も、これからも、みんな、そのように大自然に還る。本来無一物、生きとし生けるもの、おしなべて怨親平等と思えば、心も安まる。

(この「仮名本」とは、通俗的な読み物という意味であるが、平がただで分かりやすく書かれた本というわけではない。仮名法話集、仮名草子、御伽草子の類いも、漢字まじりであり、スラスラと読めるものではない。本文は以下の通り。)

「未生以前、本来無一物なれば、後るるにもあらず、先立にもあらず、己身(の)弥陀、唯心(の)浄土と悟りぬれば、此処を去る事遠からず。さりながら……」(『竹斎』)

本来無一物、未生以前、己身（の） 弥陀

本来無一物は、①本来、世に存在するものには永久不変の実体はなく、空であること。
（すべては、相依・相関の関係性において存在するのであるから）、本来、執着すべきものは何もないはずだということ。 ②人が生まれてきた時は何も持っていないこと。

未生以前は、（親も）生まれていないころのこと。相対的差別を離れた絶対無差別の境地。（もとは「父母未生以前」の略だが、「父母」以外でも使われる。）

己身（の） 弥陀（己心の弥陀）、唯心（の） 浄土は、阿弥陀仏も浄土も、心のなかにあること。（『遠羅天釜』など）

この『遠羅天釜』は江戸時代の白隠慧鶴の書で、諸侯・武士・農民・職人・女子に、それぞれの仕事に忠実に励む「ふだんの坐禅」を通しての成道を説いたものである。

また鎌倉時代の道元は、典座（台所仕事）の中に禅道ありとし、精細な洗面・菌磨の作法を述べ、「のち礼仏、誦経、焼香、坐禅すべし」とする。（『正法眼蔵』）

1) 中村元『仏教語大辞典』

2) 拙著（筆名・西允人）『たまきわる いのちを ゆるり大往生』 389頁参照

仮名本『竹齋』

正しくは仮名草子（草紙・双紙）で、くずし書きの仮名ないし仮名交じりの本のこと。江戸時代の初期に、手書きの写本のほか、印刷本も出版された。内容は、やや文芸的・通俗的な道中記、和歌や俳諧・趣味・役者や遊女の評判記など。町医者が貴人・諸侯らの求めに応じて書いた『竹齋』は、自称「天下一の藪医師」が生業ままならず、粗衣で狂歌や発句も作りながら、京から尾張、江戸へと転々とする。（芭蕉のような風雅の旅ではないのだが、『困の身は竹齋に似たるかな』は、芭蕉が尾張に寄ったときの挨拶の句である。）諸国を転々としながら、珍妙な治療を施し、ときの運で、感嘆されたり、なぐられたりする。ふとどきな戯言もまじえ、物語や歌集、和漢の故事・詩文をもじり、掛け言葉を駆使して、世相を風刺したパロディである。多くは、美少年に懸想する侍が剃髪して東にくだるまでに割かれている。この無常の世に仏を求める機縁を勧め、女人や罪深き人も含めて、衆生はすべて仏となることができるなど、孫引きではあろうが、法華経・華嚴経・涅槃経・浄土経、禅、密教、大智度論、謡曲などから数多く引用されている。御伽草子『猫の草子』にも、「阿弥陀仏、ここを去ること、遠からず」という引用がある。（5世紀初めに漢訳された『観無量寿経』からの引用。）

「浄土は、やがて辿りつく地つづきのところであり、手だてを尽くせばそこへ渡れるはずのところでもある。¹⁾」

「仏は常にいませども現ならぬぞあはれなる／人の音せぬ暁にほのかに夢に見え給ふ。」
「弥陀の御顔は秋の月、……」 『梁塵秘抄』（平安末期の雑芸の歌の集成）

「それ仏法、遥かにあらず。心中にして、すなわち近し。²⁾」 （『般若心経秘鍵』）

こういう見方は、自分の心のなかに菩提の種子があるという真言宗の基礎になる。³⁾

ただ悟りの「種子」があつて「基礎」になるということであり、単に心のみを重んじればよいというのではない。一元論だけでなく、二元論についても、その陥穽^{かんせい}について、この『選集』は、随所で警告しており、かたち、動作などの重要性について力説されている。

- 1) 『金岡秀友選集』第九卷6頁
- 2) 空海・8～9世紀。7世紀、中国の明曠^{みょうこう}の『般若心経疏』に同文あり。
- 3) 同・第一卷188～189頁、「菩提」は悟り（俗に冥福の意）

数十年前の第二次大戦中、日本の庶民は、召集令状一枚で、「わが大君に召されたる」などと軍歌に「称えられて」、戦地に駆り出された。そして敗戦後は、ロシアにおいては、捕虜として不条理なノルマを強いられ、多くの人が客死した。遺骨は、「極光のかけに」埋もれている。いまは、平和な海や山河で散骨も行われているが、それとは全く異なる。無念の、一兵卒・香月康男の絵の兵の遺骨は、志ある人にとって、ただその冥福を、心に祈るだけで終ろうか。異国に土を掘りおこし、憤怒と涙とともに、計りしれぬ思いを掬う。

(このロシア語・ノルマは、歴史に未決済の非道の証として抑留される。またチベットは中観派の思想の定着に新境地を切り拓いた偉大な思想家ツォンカパを生み、独自の仏教圏を築いてきた国だが、中国の若き日の胡錦濤は、そのチベットを赤い血に染めて解放した。そして米国は、日本に原爆を投下して民衆殺戮を犯して以来、今なおグローバルに独善的な自由をほしのままにし、いずれも大国の我欲・我執ゆえの愚かな歴史を繰り返している。)

召されたる 兵を 凍土に 掬わばや

身と心 二つながらに 相薫ず

仏教では、物^ニ色^{シキ}と心が互いに影響し合うことを「色心互薫^{シクン}」といい、両者が融合して一体になることを「色心互融」という。また、二つのものに対立がないことを「不二」という。安易に「対立がない」などとはすべきではないが、内と外、自と他などの事柄が、一体にして自在であることを「内外不二^ゲ」という¹⁾。

物と心、物質と精神などのように、物事を二つ対立させて考えたり、原因と結果とを、直接結びつける科学の考え方が支配的になれば、不価値の要素や、よく分からない要素に敬意を表する宗教的な考え方は育ちにくい。不二とは、二つを無理やり一つにすることではなく、二つが二つのままあって、二つとすることを意識しないで済む状態のことをいう。一心に自分の力（我功德力^{クドク}）でやれば、必ず如来の力（如来加地力^{カヂ}）を得る。この二つが共に働いているのが法界力^{ホウ}で、（二つの中心をもつ）こういう楕円的な行動様式が考えられる²⁾。（このように金岡秀友師の語り口は、人の心にスッと入ってくるものがある。こう並べてみると、それがよく分かる。そういう意味もあって、出典は頁末尾に記す。）

1) 中村元『仏教語大辞典』・不二

2) 『金岡秀友選集』第二巻245頁、第一巻77、94頁

テレビの介護の番組で、ある認知症の老父を介護して、心身ともに疲労困憊していた人の話が紹介された。介護の労に報いる言葉もないどころか、その反対の無残な言動が続く毎日、もう、このまま終わるか諦めていたある日、その老父が、ふと、仏壇の亡妻の遺影を眺めて、カアチャンが、あそこにおる……とかいつてから、介護しているその人に向かつて、おまえにも厄介かけとるが……とかいったという。(放映は方言なので、正確には再現できない。実際は、もっと情もこまやかである。)

想像するに、この奇跡は、この人たちにとって、壁に写真を飾っただけの部屋では起きにくいことではなかったろうか。幾星霜、毎日、生前の妻が仏壇のお先祖さんに向かつて手を合わせた、心を澄ませる音色の「おりん」の残響と同じ静寂のなかで、線香を立てて、供物を供え、また手を合わせるといふ、きわめて日常的な宗教性が浸みついているなかでこそ起こったのであろう。「厄介かけとる」という一言によって、介護してきたその人は、長い年月、耐えに耐えた絶望の淵から一瞬、救われたという。その人の「一心が如来の力を得た」のだろう。『覚悟の介護』の著書もある荒木由美子さんは、ゲスト司会者として、その短いファックスを読みあげながら、突如、美しく顔をゆがめて、しゃくりあげ、嗚咽おえうした。(NHK教育テレビ・『福祉・認知症の介護』・05年10月13日・20時)

これこそ日常的な「物と心が互いに影響し合う色心の互融」であり、「一心に自分の力（功德力）でやれば、必ず如来に感応して發揮される力を得る。そして、この二つが共に働いている法界力」をここに見ることができ^{ひろがえ}。翻つてどのようなことが私たちの前途に控えているだろうか。あとで触れることになるが、わが伴侶も、老いの道を歩みつつある。日々起居をともししているわけではない息子は、母親に頼まれて、そのとおりにやっただけに「そうじゃないの！」とボケをかまされ、一瞬、たじろぎ、「逆切れダー！」とオドケてこらえ、丁寧にやり直し、かげで、「親父サンみたいに暖かくやれるか、自信ないナ」という言いかたで、ははそはのはの老いの先々、ほのほのとした思いに遺漏なきを「厳父」に、それとなく求めた（と「厳父」は自戒した）。べつの日の帰りぎわ、長女は、「罪を憎んで人を憎まず」というけど、病と見切つて、ママを頼みます」などと、ははそはのははまがい^{まがい}に言いおくごとくにピシッと決めて（と「厳父」は自戒した）、孫と帰つていった。

メモ①…高杉一郎に『極光のかけに』（目黒書店・一九五〇年）の著作がある。（26頁）

メモ②…米国には自国の者なら一兵卒^{ブラズマイト}でも救出するという一兵卒^{ブライベイトラウんぬん}云々の題の映画がある。

メモ③…蛇足ながら「ははそはの」（または「ははそばの」）は（いたわしい）母の枕詞。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

岸 正利 (きし まさとし)

1930年、東京に生まれる。

都立立川高校卒、旧制二高修了、都立大学・人文学部・中国文学専攻。

公立の済美、松の木、第二商業、第五商業、神代高校に勤務。

著書は、言葉に関するもの二冊（不昧堂、学事出版）および

教育史などの参考書四冊（時事通信社）。

『たまきわるいのちをゆるり大往生』（筆名・西允人・文芸社）など。

虹が流れるように ——川柳《色即是空》ものがたり

2006年5月15日 電子出版発行

著 者 岸 正利
発 行 者 瓜谷 綱延
発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
電話 03-5369-3060（編集）
03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Masatoshi Kishi 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-01115-1

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。）

新 06.05.01 Y.H.